

はねばならない。  
勿論労働訓練は社會事業である。寧ろ社會事業だからこそ、尙更明朗なるものとせねばならないのである。  
明朗なる訓練、愛の訓練、過去の暗影を捨て、天心爛漫なる本來の姿に還つて、ひたむきに希望の丘を目指して進ま

しむる訓練、そして訓練修了生が社會場裡に出て、他の人に對し一種の誇を以て労働訓練所出身を言明し得るやうに、その内容並社會的名聲を考慮して労働訓練事業を進行せしめることが何よりも肝要であらうと思ふ。(一三、四、八)



# 衣食住から觀たルンヘン

郡

昇

作

一、ルンヘンとは何ぞや

イ、緒 言

ロ、語 原

ハ、浮 浪 者

ニ、流 行 語

ホ、ルンヘンの考へるルンヘン

二、住居から觀たルンヘン

ヘ、簡易生活者

二、住居から觀たルンヘン

イ、緒 言

ロ、特定の住居の無いもの

ハ、大阪市の實例

ニ、結 話

ホ、野宿する理由其ノ一

- ヘ、野宿する理由其ノ二
- ト、野宿する理由其ノ三
- チ、特定の住居を有するもの
- リ、特定の住居に起居する理由其ノ一
- ヌ、特定の住居に起居する理由其ノ二
- ル、結 話

三、食物から觀たルンヘン

イ、自ら炊爨しない人々

ロ、接 待

ハ、自ら炊爨する人々

ニ、一般の口にしないものを

ホ、A口にする

B人

ルンペン (Lumpen) と云へば一般の人々の中には『櫻樓を着た怠者』といふ程度の概念よりお持ちになつて居られない方が多い様でありますし、田園地方の方々の中には此方面のことを殆んど御存知の無い方があるかに承つて居りますので、そうした人々に私達のことを知つて戴きたい

元々ルンペンは獨逸語であるが、今日では完全な日本語となつて居ります。本來の意味は櫻樓であるが、我國では櫻樓を纏つた人々を指す様になつて居ります。ですから英米人はルンペンを知りませぬ。最近のことであります。神戸のカナダ學校の生徒さん達が私達の住んで居るルンペン村を見學にお出でになりましたとき、私達ルンペンを前にして『ルンペンと云ふは何のことですか?』と御尋ねになつた程であります。それで『ツラムブ (Stamp) のことです』と申し上げて初て合點が行かれた様であります。井上十吉先生の英和辭典をみますと『無宿者、浮浪者、ごろつき、漂浪者』と譯註が出て居ります。コンサイス・オツクスフオード辭典には『家なき労働者』といふ譯語と『バガバント』 (Vagabond) といふ譯が出て居ります。バガバントの註には『怠け者で人間として無價値な漂浪者』とあります。各の國へ参りましても大體同じ様な人間と、同じ様な考へ方の人が多い様であります。然しルン

ベンは單なる漂浪者ではありません。又單なる怠け者でもありません。ツラムブは我國で云ふルンペンとは可なりの距りがあつて、ルンペンを意味するには充分なものではないのではないかと疑つて居ります。

## ハ、浮浪者

在來の日本語で之に類するものは無宿者、浮浪者等があるが、無職の徒と云へば、直に博徒を想起せしめ浮浪人と云へば無賴の徒を思ひ出さし易いのであります。ルンペンと云ふ言葉程にぴたりとルンペンを語るものはないであります。これ程切實に近代の新種族、都市のどよめく怪物（英國あたりでは左様に云ふ）を我々に告知するものはないであります。ルンペンと云へば人々は直に頭髪が蓬か繩の様に撫れ撫れになつた、見るからに氣持の悪い、半ば裸の、垢や埃にまみれた眞黒の、而も泥々の櫻樓を纏つた、異様な、人間とは別の種類に屬する獸類（英國あたりでは左様に云ふ人さへある）眞性ルンペンを考へ、之を人間並には取扱はない様であります。

## ニ、流行語

今までの流行の傾向は、總て上層から下層へ流れて居

爲めにこゝに各種の方面からルンペンに就ての概念を求める努力を拂つてみたいと存じます。

## ロ、語源

りますが、ルンペンといふ言葉のみはこれとは正反対に下層から上層へと逆流して、サラリーマンにも實業家にも、政治家にも愛用???: せられることさへあります。單に遊んで居る、特定の職業がない、一時休養状態にある、樂隱居の状態にある。呑氣に生を樂んで居る、意見が定まらない、絶へず出張して席の温まる暇がない等等……と云ふが如き意味を簡単に表現する爲めに使用せられるほか、特定の收入がないことをも意味せしめて居ります。即ち經濟的に恵まれた無爲の生活状態と、經濟的に恵まれない境遇等を輕く手短に要領よく表現する爲めに『ルンペン』が使用せられて居ります。

## ホ、ルンペンの考へるルンペン

それでは私達ルンペンは自分達を何う考へて居るか、即ちルンペンと云ふ言葉の持つ意味を何と考へて居るかを申し上げますならば、自分等は食祿を離れた浪人である、誰一人顧みる者もない失業者であると考へて居ります。丁度第一線を退いた政治家、子に家督を譲つた樂隱居、現職を退いた官公吏が自分自身を『ルンペンですから』と云ふその様な軽い廣い意味に考へて居ります。實際に於て一般

労働者よりも更に低い階級、經濟的にも政治的にも、最下層に位し、衣食住から自分自身を完全に保護することの出来ない勤労大衆が今日では、ルンペンとして考へられる様になつて参つて居ります。労働下宿に起居するもの、定職はあつても簡易宿の生活より出來ないもの、自由労働者、斯うした生活難と戦ひつゝ辛うじて露命を繋いで居る人々がルンペンとしてその範疇に入れられる様になつて來て居るのであります。

#### ヘ、簡易生活者

以上を要約致しまするならばルンペンと云ふ言葉は檻穂から檻穂を纏つた人となり、時には浮浪者を意味し、時に無宿者を指す様になつたのであります。それが更に侮蔑的に近代都市の新種族を意味するに至つたのであります。ところが更に進んで無爲の生活状態や、經濟的に恵まれない状態を時には恵まれた状態を指すに至つたのであります。即ち此の言葉の抱括力が擴大されその内容が豊富につたのであります。換言致しますると『ルンペン』の定義が未だ判然として居らず、使用者や聞手に依つて内容に異なるところがあるとも云へると思ふのであります。然しながら

先づその安息所や睡眠の場所から考へてみたいと存じます。一口にルンペンと申しましても色々の段階があつて、その休息所にも大變な相違があります。然しこれを大別して、特定の住居の無いものと、特定の住居を持つて居るものとの二つとすることが出来ます。

#### ロ、特定の住居の無いもの

特定の住居の無いものは何んな場所で睡眠をとるかと申しますると、ガード下、橋梁の下、川原、塵芥捨場、人家の軒下、公園、森の中、籠の中、地蔵堂、大木の下、巨岩

ら最も普通に最もよく使用される意味は簡易生活者と云ふ程度のものであらうと存じます。簡易生活者と申しますると寮舍や、下宿に寄宿する學生も、ホテル居住の富裕な人も共に簡易生活者であると云ふことが出来ます。然しこゝで云ふ簡易生活者とは經濟的に恵まれない人々のことであることは勿論であります。今から私達ルンペンの思想や感情や生活が、そして衣食住や、職業が如何に簡易なものであるかを御報告申し上げたいと存じます。

#### ニ、住居から觀たルンペン

##### イ、緒 言

雨戸や表戸を閉して寝ねばならない財産のある人々を高い山の上から見下す様な氣持で可愛そうに考へることすらもあります。ペイヴメントの上で寝て居ると午前一時頃からは冷やかな風がそつと頬を撫でて行きます。何とも云へない静けさと淋しさを樂むことが出来ます。芝生の上は寝轉んだときからす一つとする位冷やかでありますが、芝草と土の持つ濕氣と、夜露のために身體一面しつとりと濡れ、翌朝は重病人の様になつて、非常な倦怠を覚えます。仕事をする氣力もありません。朝風呂に入るとしyanと元氣を取り戻しますが、虱のついた檻穂を纏つてゐては恥しくて錢湯へも行けませぬ。又湯屋も嫌つて入れてはくれませぬ。金もありません。今日では朝風呂も廢止になりました。夜露は身體に毒です。ですから、木の下や軒下に之を避けるのです。土の濕りも有害です。ですから新聞紙一枚を下に敷いて休むのです。私達の仲間は野宿して、肺炎になつたり、喘息になつたり、神經痛になつたり、結核になつて寒い冬や氣候の變り目に次から次へと死んで行くのです。

#### 食 衣 住 か ら 觀 た ル ペ ン

の下、檻の様な小屋、土地を掘り下げた穴、屑車、墓地、鐵管の中、土管の中、神社や寺院の様の下等でありまして、私達は之等の場所に潜り込んだり、うづくまり込んで安らかな夢を結びます。然し冬は寒くてとても寝るどころではありません。夜通し塵や木片を焚いて暖を取りながらうつら／＼と夜を明します。嚴冬の夜等はいくら火を焚いても手足が凍へて全身ががた／＼と震えます。それでも夜中を過ぎるとうつら／＼としてついまどろむこともあります。然し再び目を醒したときは大火傷をして居ることが度々あります。手足の感覺が鈍つて居て足袋に火が附いて、膝から下の衣類が焼けてしまつてもまだ目が醒めず、股や尻に火が廻つて始めて氣がつくのです。私達は野宿して病氣になつたり、火傷をしたり致しますと私達の保護機關へ頼つて行つて無料で醫療を受け、給食をして戴いて、元氣になるまで無料で泊めて戴きます。月を拜み月を樂み、星を仰ぎ、星を樂む春秋には、天下には自分程幸福なものはない、そんなに思ふ時もあり、家の中で寝て居るものがまことに哀れな存在であるかの如く考へるときもあります。失ふものも無く盗まれるものもない私達は蒸し暑い夏の夜等

真夏の夜の夢を結ぶに大阪市で一番涼しい、心持のよい寝所は四天王寺の回廊のあたりです。蚊も居ないし、涼風が夕方から明け方まで吹き通します。天王寺公園は廣くて身を隠す場所も多いが蚊が多いので困ります。此の公園で一番涼しいよい場所は池上市長様の銅像の礎石の上です。

然しこゝへは十人位より寝られませぬ。一番多く寝て居る場所はグラウンドのコンクリートの階段です。新聞紙一枚敷いて數百人がすらりと寝て居るところは壯觀です。芝生の上にも數百人を發見することが出来ます。其他木の下や八ツ手の茂の中で寝て居るものもあります。日本式庭園の東屋の下で輪になつて寝て居るものもあります。

この亭を『一本木』と私達は申して居ります。然し冬になると塵捨場で四、五人が焚火をしながら寝て居るだけです。中之島公園は涼しいことは涼しいが、夜中を過ぎると風邪をひきます。ぞつとする程に氣温に變化が出來るのです。ですから盛夏の候でもルンペニ氏の姿を見かけませぬ。

## ニ、結語

これ等の場所は一般の人々が寝ない場所であります。こ

のことから考へますとルンペニとは普通人の寝ないところで寝る人々であると云ふことが出来ます。

## ホ、野宿する理由其ノ一

此處で途草を食ひますが、何故私達の仲間が外で野宿するかを申し上げたいと存じます。寒い冬は宿屋や下宿屋や保護施設で重り合つて、時には三疊の室で五人も六人も、ひどい時は十人も十二人もが押し合をしながら動物熱によつて温りながら心持よく休みますが太陽が北へ寄るに従つて蒸し暑くなり、息切れがする程に苦くなつて参ります。それに『五月雨に南京虫登城虱下城』といふ俳句さへある如く、活潑になつた南京虫が終夜猛襲を敢行致します。何んなに強いものでも生血を吸はれて蒼くなつて行きます。老弱者が多いのです。外で寝ることは夜露や大地の濕りの爲に身體に害があるのですが、それでも家中よりは外が極樂なのです。宿賃も要りませぬし氣兼もありません。

## ヘ、野宿する理由其ノ二

然しここで一言報告申し上げて置きたいことは冬でも屋外で寝る人のあることです。金をあけるから保護施設や宿

か！ 銅の洗面器やアルミの馬穴がごろ／＼して居る筈が無いではありますぬか』と私に上手に教へて呉れる外で寝て居るルンペニ氏もあります。

## ト、野宿する理由其ノ三

以上の外屋外で寝る理由には不具の爲仲間から嫌はれて屋内で寝られないもの、寢小便の爲に疊の上で寝られないもの、仲間の持物を胡麻化す爲に追ひ出されたもの、喧嘩好きで仲間から排斥されたもの、賭博や酒の爲に寝る場所の無くなつたもの、家族連れの爲に宿屋で泊るだけの收入が無く、又家族持を收容する保護施設が無い爲に小屋を作つてその中で寝たり、橋の下で寝たりしなければならないものもあります。尙保護施設では一定の時限外の出入を禁ずる爲我儘なものは自ら好んで外で寝るのです。

## チ、特定の住居を有するもの

特定の住居を有するルンペニ達は何処で寝るかと申しますと労働下宿、無料宿泊所、公私社會事業團體の經營する低廉な宿泊所、屑物寄せ屋、水上ルンペニ村等でありまして、標準生活者の起居しない場所であります。このことから考へますならばルンペニとは標準生活者の

起居しない場所で起居するものであると云ふことが出来ます。一戸を構へたり、少くとも二階借をするのが普通の生活であるといふことから考へられて居るのです。

#### リ、特定の住居に起居する理由其ノ一

それでは何故彼等が此等の宿所に起居するかを申し上げますならば、第一に經濟的であると云ふことあります。此金錢上ののみならず、時間的に見ても經濟的であります。此等の宿所は少額收入者の爲には最も好都合な條件を多く備へたところであります。此等の場所で彼等は選擇權さへ與へられて居ります。生活必需品も手に入り易いし、浴場、食堂等の設備もあつて、極めて文化的に便利に出来て居ります。又衛生施設もまづ完備致して居ります。

#### ヌ、特定の住居に起居する理由其ノ二

その上此等の場所では彼等は自分と同じ様な不幸な境遇にある友を多く發見することも出来ますし、互に慰め合ふことも出来ます。一人で二階借をして、自炊したり、雨や雪の中を遠くへ食事に出かけたり、話相手もなく無聊に苦んだり、一日の仕事を終へて歸つて來てから火をこしらへたり、寒い冬にぼつねんと火の氣の無い部屋で心配や苦

勞ばかりする必要もありません。善良な妻が家庭を心地よいものにするのと同じ様に此等の場所は良い管理者によつて立派な家庭となつて居るのです。二階借をする力のないもの、妻を持つ收入のないもの、そうした彼等にこれ程合理的な心地よい住居は他にはないのです。

宿泊所は澤山ありますが家族持を泊めるところは殆んどありません。婦人専門のものは男子を連れて居るものも泊めず、男子専門のものは女子や子供を連れたものは泊めませぬ。低廉な住宅を借る資力もないものは、妻の爲、子供の爲、何處で寝る可きでせうか！簡易宿か、野宿か、小屋を建ててその中で寝るより外はありません。

#### ル、結語

以上特定の住居を有せざるものと、有するものに就て再考して見ますに、此等の場所は普通人の寝ないところであり、標準生活者の起居しないところであります。ですからルンペーンとは普通人の寝ないところに寝、標準生活者の起居しないところに生活する人々であると云ふことが出来るのではないかと考へるのであります。

#### 三、食物から觀たルンペーン

#### イ、自ら炊餐しない人々

食事に就て考へて見ますに之を三種に分ち得るのではないかと思ひます。その第一は自ら炊餐しない人々であります。一ぜん飯屋や食堂で腹を充す人々です。下宿屋で食事をする人々です。接待を受けて食慾を満す人々です。ピラ配りやチンドン屋の旗持等は市内を到るところの飯屋や食堂のあるところをよく知つて居ります。量の多い、美味しい、安い飯屋をよく知つて居ります。ですから晝には少々早くてもその安い飯屋まで來ると食事をします。晝を少々過ぎて居ても目的の飯屋へ來るまで辛棒して居ります。又可なりの廻途をしてもその飯屋まで行つて食事を致します。食事前になると無意識にその飯屋へ到る街道を選んで歩いて居ります。玉造方面では何の家、梅田方面では何の家、九條方面では何の家とちやんと定めて居てその選んだ家の前まで來るとびつたりと自動的に足が止ります。私達の仲間は時には和歌山、神戸、京都、中京あたりから九州の果までも廣告人夫として出張して行きます。それで到るところに馴染の飯屋が出來るわけです。

#### 〃接待を貰ひそこねた春の雨〃

彼等が接待に期待するところが大きいものであることが一目瞭然です。私達の仲間が天王寺公園やその附近に、又飛田遊廓方面に多いのは飲食店が多く、客の残した御馳走、残飯等を安價に、時には無料で手に入れることが出来ることがその一の原因となつて居ります。

#### ハ、自ら炊餐する人々

第二は自ら炊餐はするが一般の人とは異つた方法でする人々です。驚いてはいけませぬ。何も炊餐す可き用具がないときは女のネルの腰巻で御飯を焚くことさへあります。

腰巻を二重にして五合位の米を入れ野火で直に焚きます。ほこりと美味しい御飯が出来ます。鍼力罐で炊くこともあります。

A 第三は一般の人々が食しないものを口にする人々です。

夏季に山野の水瓜、梨、蜜柑、等で露命を繋ぎつゝ旅をする人や、貰つた米を金に代へて腹を充す人も此の範疇に入ります。その外に他人が塵箱に捨てた残飯、腐敗した果實、メロンや水瓜の皮をむしや／＼と汚れたまゝを手摺に食ふ人々があります。又牛馬の臓物を盛に食する人々があります。スマムへ行くと臓物を澤山に賣つて居ります。痩せた彼等はこれ等の榮養品に群つて舌鼓を打つて居ります。それから犬や猫や鼠の肉を食ひます。

B 昭和拾貳年七月拾參日の大阪朝日新聞に『うまい鼠の青竹焼』といふ題で探險家宮島武氏の談話が乗つて居りました。セレベス島中部山嶽地帯のトライヤ族は容貌習慣ともに日本人と似てゐる。一番の御馳走は犬、鼠、蛇等を青竹に入れ、それに香料の草、食鹽などを加へて長時間焼くの

— ンペんル 觀た か 住 け 食 衣 —

だが、非常に美味しいとありました。

これ以上にひどいことを耳にしたことがあります。それ

は昭和九年八月のある夜、真夜中頃から急に南大阪方面に大雷雨が襲来しましたときのことです。ルンペん小屋の軒先に集つた仲間が馬や猫や蛇や蛙の肉の話ををして居りましたが、終にそれが鼠の肉の話を入つて行きました。

『〇〇が御馳走してやるから來いと云ふから〇〇を連れて行つて驚いた。何ば御馳走してやると言つてもあれでは食へない。鼠を腹綿も取らずに丸焼にしてあるし、おまけに毛もむしりてない。腐りかけて蛆がわきそなを突出して美味しい／＼とすゝめるのだ。箸を取つたが臭くて何うしても食へなかつた。それをよいことにして彼は一人して食つてしまつた』

C 釜ヶ崎方面へは腐敗した果物、ひからびた果物、カビの生へた菓子、濕つた菓子、他所では賣ることの出来ない菓子をよく賣りに参ります。ところがそれが安いので羽根が生えた様によく賣れて行きます。それに就て斯んな面白い出来事さへあつたことがありました。一人の商人が自轉車の後へ濕つて黴の生えたせんべいを私達の居るところへ賣

云ふことが出来ると思ひます。

#### 四、味 覚

りに来ました。捨てる代りに安く賣るのだし、こちらから買ひに行くのが嫌な人々のところへ持つて來るのであるから何時來ても直に賣れてしまひます。四方八方から手を出して奪ひ合ひをする程で瞬く間に賣り切つてしまふのが常なのでですが、此の日のみは、雨上りの收入皆無の午後であつた爲か、手を差出するものが一人もありませんでした。其中に元氣な一人が『馬鹿にすな！ 斯んな腐つたものが食へるか！』と云つたと思ふと菓子箱を自轉車もろ共ひつくり反してしまひました。周囲のものはわめき立て、菓子屋を罵りました。菓子屋はさん／＼な目に遭つて這々の體で逃げ去りました。菓子屋の姿が見えなくなると三日も四日も缺食してゐた老人達は先を争つて落ちて居る菓子を拾つて食つて居りました。泥水の中に落ちたのも、徽臭いのも厭はずに食つて居りました。元氣な男は『おつさんあんまり食ふと中毒るぜ』と言つて空を仰ぎました。

#### ホ、結 語

以上を要約致しまするならばルンペんの中には自ら炊餐しない人々や、自ら炊餐はするが一般とは異つた方法でする人々、及び一般に食しないものを口にする人々があると

煮てもヒリ／＼する程に生姜を入れてあるのを好みます。ハイシライスよりはカレーライスが好きで、酒よりは焼酎がよく、焼酎よりは泡盛がよいのです。泡盛は手足の自由を奪う程に強烈であり、二三年も飲み続けると胃の内面が爛れて生命を失ふ程なのです。猪口に入れてマッチを近づけるとバツと火が移り水と共に飲まなければならない程に強烈なのです。このことから考へますとルンペーンと呼ばれる人の中には刺戟性の食物を好む人があると云ふことが出来ます。要するに味のよいよりは量の多いことが好ましく、鹹、酸、苦、甘よりは刺戟の多い辛の方がよいのです。尙今一つ申し上げたいことは魚肉や牛肉等の動物質のものを好むことです。日本人は農業民族であり、菜食民族であつて恬淡なるものを好むが、ルンペーン氏達は動物質の食物を欲求することが甚だしいのです。缺食と栄養不良と労働と現在の境遇が彼氏達の食欲と味覺に變調を起さしめるのでは無いかと思ひます。

## 五、臭覺

食欲や味覺に關係の多い臭覺は極めて疲労し易いもので、俗には直ぐ慣れると申して居りますが、特にルンペーンのつかぬところで涼をとりますが、嚴冬の候には新聞紙を繩で纏つて體温の散逸を防ぎます。

は病人の着て居たものや、摩り減つた檻襷々々、南京虫と虱の巣窟となつたもの、色の褪せた見窄らしい模様のもの、時代から遠ざかつたもの等で塵箱に捨てられたもの、川や池で拾ひ上げたもの、海岸に打上げられたもの等を着用致します。愈々着用する何物もないときは夏は裸で人目のつかぬところで涼をとりますが、嚴冬の候には新聞紙を繩で纏つて體温の散逸を防ぎます。

## ロ、恵まれたもの

又ルンペーン氏達は恵まれたシャツ、バツチ、下駄、靴、帽子、帶、襦袢、足袋、法服、股引、着物等を得意そうに身につけて居ります。少しでもよいものを少しでも澤山恵まれることが名譽であり、腕のあることとなり、他人の同情を受けたり、愛せられることが自慢の種なのです。實際を申しますと左様にするより外に他に方法のない彼等なのです。新品を買う餘裕の無いものが多いのです。普通の人々の着ないもの、恵まれたもの、これ等は各も他人の不用品であり、捨てたものであります。従つてルンペーンとは一般人の捨てたものを着用する人々であり、代價を支拂はずに入手したものを着用する人々であると云ふことが出来ま

氏達は慣れ切つて居るのであります。塵箱の蓋を取るとぶん／＼と飛出す蠅の翔きと共に、バツと顔を襲ふ腐敗した果實、野菜、魚肉等の形容詞に苦む混合した惡臭、古びた小屋の黴臭い濕つた空氣、垢と汗と特有な體臭と高熱から發する病人の臭氣、むつとするいきれ、そうしたものも何とも思つて居りませぬ。大小便の臭氣が食事場へ入つて來ても何とも思ひませぬ。思ふことも考へることも出來ない境遇に追ひ詰められて居ります。然しながら黴毒の爲に鼻の落ちかけた男の潰瘍した臭氣のみはルンペーン氏達でも辟易致します。

## 〃落ちかけの鼻を罵る暑さかな〃

## 六、衣類から観たルンペーン

イ、一般の着用しないもの  
ルンペーン氏達は一般の人々が着用しないものや恵まれたものを身に着ける人々であるといふことが出来ます。少くともそうした人々がルンペーンと呼ばれる人々の中にはあると思ひます。新品を買ることは殆んどありません。又仕立さすこともありますね。たま／＼新品を買ひ者があると直ぐ『新品』と云ふ綽名を頂戴する程に少いのです。彼氏達

## す。

## ハ、代價を支拂つたもの

然し總てのルンペーン氏達が皆代價を支拂はないもの着用するわけではありません。中には心掛のよい人もあつて、常に代價を支拂つて得たものばかりを着用して居る人もあります。例へば古着屋から古物屋から、見倒し屋から、手に入れたもの、食費に困つた同僚が手離すもの、歸國旅費に困つた旅人が手離すもの、仲間の屑拾や屑買から相當の代價で手に入れたもの等であります。立派な洋服を着用した紳士もルンペーンの仲間へ顛落して來るとその翌日には金に代へることの出來ない檻襷一枚になつて居ることが多いのです。要するに普通人の着用しない程度のものより着用し得ない彼氏達は一枚の着替をも持つて居ないのが普通であります。

## ニ、一枚の着物

ですから此の一枚が晝間は勤勞服であり、晴着であり、外出着であり、禮服であるわけであります。そして夜間は寝衣であり、寝具（蒲團）であるわけであります。又死亡したるときはこれが經帷子となる理であります。

「元旦や虱殺しが初仕事」

「彼岸會に日向ぼっこで虱取り」  
春の彼岸にはまだ／＼虱が澤山に居りますが、五月になると暫く虱の數も減少して参ります。天王寺公園で植木市が開かれる時分からは屋外で寝ても凍死する心配がなくなります。櫻の花が濟んで、梅の實が街に出る様になる時

分から、青葉の蔭で風りんの涼しそうな音が暑くるしい蟬の聲に混つて聞える時分になると、そして金魚屋と氷店が繁昌し、海岸と山頂に臨時都市が形成せられる時分になると、ルンペニ氏達から虱が姿を消してしまひます。金剛山頂の雪が解けてしまふのと時を同うして、虱が居なくなります。着替のない彼氏達も裸で涼を取りつゝ、洗濯をするからです。垢も虱の卵も洗ひ流してしまひます。然し秋になつて六甲の上に連波の様な雲がすつきりとした空に現れる様になり、香落谿や寒霞谿が錦に包まれると虱がごそ／＼と出て参ります。乾いた空氣に風邪を引き易くなると垢で黒くなつた襦袢や煤けた衣類には縞の目の様になつて群りついた觀音様（虱）を發見する様になります。死んだり致しますと冷たくなつた死體からは虱の大軍が四方八方へ行

の聲に混つて聞える時分になると、そして金魚屋と氷店が繁昌し、海岸と山頂に臨時都市が形成せられる時分になると、ルンペニ氏達から虱が姿を消してしまひます。金剛山頂の雪が解けてしまふのと時を同うして、虱が居なくなります。着替のない彼氏達も裸で涼を取りつゝ、洗濯をするからです。垢も虱の卵も洗ひ流してしまひます。然し秋になつて六甲の上に連波の様な雲がすつきりとした空に現れる様になり、香落谿や寒霞谿が錦に包まれると虱がごそ／＼と出て参ります。乾いた空氣に風邪を引き易くなると垢で黒くなつた襦袢や煤けた衣類には縞の目の様になつて群りついた觀音様（虱）を發見する様になります。死んだり致しますと冷たくなつた死體からは虱の大軍が四方八方へ行

軍從列を作つて進撃致します。棺卷を火の上に翳しますと胡麻を煎る様にパチ／＼と無數の虱が噴死するのを知ることが出来ます。着替を持たない爲に洗濯をしないのと、寝具がない爲に湯に入つて垢を落すと風邪をひくからです。勿論湯に入る氣力もないし、湯に入ることが支那人の様に嫌いな人もあるのです。

### 七、衣食住の比較

#### イ、最も大切なもの

以上衣食住三つの中で最も大切なもののから順次並列致しますと先づ最初に食が参ります。次に衣が、最後に住が参ります。家が無ければ小屋で寝ます。小屋が無ければ橋の下で寝ます。橋が無ければ洞窟で寝ます。洞窟がなければ木の下で寝ます。木がなければ軒下で寝ます。軒が無ければ石の上で寝ます。土の上で寝ます。廣い大地何處で無ければならないと云ふことはありません。公園で野宿して居て雨に遭へば共同便所の中で寝ます。衣類も必要ではあるが、無ければ夏は裸で辛棒します。冬なれば新聞紙を荒縄で身體に結びつけて辛棒致します。莫産や筵を身體に捲いて辛棒致します。拾つた襦袢で當場を凌ぎます。然し空

代にも差支へる程です。飢餓に頻した窮民となりはてるのです。多くのルンペニ氏達は死に瀕した窮民なのです。

#### 「塵箱を漁るや悲し年の暮」

食費にこと缺く様になると垢を賣り拂つて粥を啜ることもあります。屑車を賣り拂ひます。屑車は夜間は垢となるのです。屑車がなくなると帽子と上衣を賣ります。帶を賣つて纏帶を致します。首巻を賣ります。襦袢を賣ります。そしてシャツとバツチ一枚になります。今度はそのシャツもバツチも賣つて垢と虱の襤々を纏ひます。そして嚴冬の折には身體をすり寄せて動物熱でわざかに暖を取つて睡眠するのです。收入は一日平均三十錢位であるが、その大部分は食費になります。若し餘裕があれば治病費や宿所料や煙草代になります。然し煙草は大抵の場合捨てられた吸殻を拾つて用を充すのです。たまには新しいたばこを吸ふこともありますが、それは刻みであります。刻みのないときは一錢を奮發してバツチ一本を買ひ何回にも分けて刻みの心算で吸ふのです。それから更に餘裕のあるときや全然餘裕のないときに、飯代もないときには持金が酒代になります。燒酎や泡盛代になります。泡盛は少しでよく酔が廻り

ルンペニに顛落するかしないかの境目にあるインテリも、屑拾に顛落したばかりの若者も、永年屑拾をして居るが何としても、何とも出來なくなつた老人も背に腹は代へられないのです。不況時代になると一文の金も、一椀の飯もないものが多くなるのです。一日の收入は二食分の食事

ます。安くて而かも時間持が致します。ですからスマム街では雨の夜等元氣な男が死んで居るのをよく見かけます。

『泡盛の夢は阿部野へ續く春』

更に餘裕があるときには性慾満足費となります。賣笑婦や男娼と遊びます。少しの金で遊びます。

『淫賣も値切ればまける春の宵』

『淫賣も金の無いとき貳拾錢』

お金がないのに飯屋で無錢飲食をするものは多いのです。

屋臺店で餅を食つても、關東煮を食つても、焼芋を食つても、廻轉焼を食つても、『借りとくぜ』と言つたまゝ

で何日経つても支拂ひませぬ。仕拂ふ能力のないものと、

あつても支拂はない性質のよくないものもあります。之を『アヲタ』と申します。この「あをた」は淫賣にもあります。『どうぼー！泥棒』と裂ける様な女の金切聲に眞夜中にビックリさせられることがあります。殺人強盗でも押入つたのかと思はれる程にもの凄いものです。然しランペン氏達の口からは『あをたじや』とすましたものです。中には『又泥棒か』と云つて居るものもあります。又男娼と遊んで、その所持品を盗み出すものの中にはあると云ふこと

です。

『泥棒の聲なやましき春の宵』

人によりますと餘裕を映畫と萬歳に費します。映畫へは早朝から寝に行き、萬歳へは氣晴しと智識の仕込みに参ります。又あるものは賭博を致します。一錢博奕です。花かるた、かけ碁、かけ将棋、新聞博奕、電車かぶ、自轉車かぶ等をやるのです。

『ひにくれた萬歳のみが面白く』

#### 八、職業から觀たランペン

職業に關しては前號にその概要を御報告申し上げましたから、ここでは其の外に理髮、マージヤン等の道樂業や、飲食店の從事員の様に道樂に誘はれ易い職業があり、又學校の教師、僧侶、布教師等の如く社會的に強い様でも弱い、少しの瑕疪でもその人及その人の家族の生活を脅す恐れのあるものや、人力車夫、活辯等の時代に遅れた職業に從事して居たもの、並に親がそうした職業に從事して居たもの等のあることを申し上げて結論へ急がせて戴きます。

#### 九、結論

のものに外ならないのであります。

最後に参考までに落ちてないものを拾つたり、何物でも之を金に換へ更に食物に換へる例を新聞の切抜や其他で擧げてみたいと思います。

◎某保護施設が出來た當時、寒からると云ふので古毛布を一枚宛興へたことがありましたが、翌朝には殆んど無くなつて居りました。皆金に換へて飯代になつてしまつたのです。

◎風もないのに窓の硝子戸がパタ／＼と倒れて毀れて行くので調査して見ると真鑄のレールが全部取り外されつたこともありました。勿論金に換へて御飯代になつてしまつたのです。

◎水道のバルブ、コツクがよく盗られて水が流しばなしになつて居る事がありました。

◎昨夜取り附けたばかりの水道から朝になつて一滴の露も出ないので調べて見ると鉛管を二つに折つて水を止めそれから先を全部盗つて行つてしまつてありました。埋めたばかりなので直ぐに樂々と掘り起せるのです。

◎水道の水が止りませんと云ふので行つて見ると鏃で根本

から盗りかけたが、勢よく噴き出した水の爲に顔一面に濡れて困つて居るのでした。

◎S 學園の宿泊部が出来たとき、開所の翌日水洗便所の真鑄を全部盗られて居るのを發見したそうです。

◎犬や猫がよく拾はれます。金がなくなり飯に困ると一匹五十錢で賣つて食つてしまうのです。

◎新しい銅の風呂釜を見ても直ぐ潰しにしたら金目だらうと話合ひます。

◎深夜の鶴泥棒

飯代稼ぎにルンペンが

茨住吉境内から

十四日前零時頃大阪港區九條茨住吉神社境内西隅の池の金網を破つて若い男が中に入り同神社に二十五年間も飼はれてゐる丹頂鶴を盗み出して逃げるのを通行人が發見、驅けつけた九條署山口巡查が約二町追かけて逮捕した。前田榮藏（二十六年）といふルンペンで『鶴を賣つて飯代にするつもりだつた』といつてゐる。（昭和十二年八月十四日大阪朝日新聞）

◎鐵泥棒のルンペン兄弟

◎拾つてきた海豚喰つて

ルンペンのお駄佛

十一日午後九時ごろ北區黒崎町省線高架下に住む拾ひ屋林榮一（五〇）が仕事を済まして同所へ歸つて來たところ手押車の中から「助けてくれ」と悲鳴が聞えるので蓋を開けて見ると一人の男が真青になつて口から泡を吹いて苦悶してゐるのでびっくり黒崎町派出所に届出ると共に附近の石外醫院に昇ぎ込み手當を加へたが間もなく絶命した。取調べたところ右の男は酒井源吉（五三）といひ同日附近的料理屋から拾つて來た海豚で一パイひつかけ上機嫌とな

つて唄ひながら車の中で寝てゐたが、間もなく海豚の効目が現はれたう／＼命をなくしたものである（昭和十三年一月十二日夕刊大阪新聞）

◎賽錢泥棒ご用

十九日前一時頃布施署徳庵駐在所詰西本直光巡查が非常招集で本署へ駆けつける途中、中河内郡盾津村鴻池の街道でうさんな若い男を捕へ調べると一錢銅貨約八百枚を所

持してゐた。三重縣生れ服部信次郎（二十八年）といひ同日前零時ごろ鴻池の村社々前の賽錢箱を壊し淨財を盗み出したものとわかつたが、同人は大阪市内各神社佛閣の位置明細圖を所持して居り時局柄參拜者の足繁き神嚴の場所を専門に稼いでゐるものではないかと引つき取調中。

（昭和十二年十月二十日大阪朝日新聞）

二十二日深更浪速區榮町四丁目街路を舉動不審なルンペン風の二人男の通行するを蘆原署員が發見取調ると所持の風呂敷包から古鐵が出て來たので署に連行追及の結果、山口縣生れ住所不定前科一犯川本金藏（四二）と同松太郎（三七）と云ふ兄弟で去る六月中旬以來西區幸町一ノ八運搬業網野竊吉方の銑鐵運搬の荷馬車のあとを付け馬子の隙を窮ひ前後三十七回に亘り銑鐵千貫約三百圓を竊取市内の古鐵商に賣飛ばして居たものと判明（昭和十二年八月二十三日）